

危機管理と日本人

大阪日日新聞 5月6日「新型コロナと文明」で、思想家の内田樹氏が標題について語っている。関心のあるテーマであり、抜粋して紹介したい。

危機管理というのは、「最も明るい見通し」から「最悪の事態」まで何種類かの未来について、それに対応するシナリオを用意しておくことである。どれかのシナリオが「当たる」とそれ以外のシナリオは「外れる」。そのための準備はすべて無駄になる。そういう「無駄」が嫌だという人は危機管理に向かない。リスクヘッジというのは「丁と半の両方に張っておく」ことだからである。

「それじゃ儲からないじゃないか」と口を尖らせる人間がいるだろうが、その通りである。危機管理は「儲ける」ためにすることではない。生き延びるためにすることである。エコノミストはこれを「スラック（余裕、ゆとり）」と呼ぶ。スラックのあるシステムはそうでないシステムよりも危機耐性が強い。

例えば、感染症用の医療機器や病床は感染症が流行するとき以外は使い道がない。「病床の稼働率を上げろ。医療資源を無駄なく使え」とうるさく言い立てると（実際にそうしたわけだが）、感染症用の資材も病床も削減される。そして、いざパンデミックになると、ばたばたと人が死ぬ。そういう危機管理の基本が分かっていない人が日本では政策決定を行っている。

「日本人はふつうに危機管理ができる」と思い込んでいるからリスク計算を間違える。「日本人は危機管理ができない」ということを与件として危機管理について考える必要がある。

今回の新型コロナウイルスによるパンデミックでも、日本人は「感染は日本では広がらないだろう」という疫学的に無根拠なことを信じ、広言していたが、それを「嘘をついた」というべきではない。

「東京五輪は予定通り開催される」も同じである。「開催されないかもしれない（その場合にはどう対応するか早めに対応策を講じた方がいい）」ということ考えた人は組織委内にもいたはずである。でも、黙っていた。口にするとたんに「不吉なことを言うな」と一喝されることがわかっていたからである。「予定通り開催される」という祈りを、「開催しない」という決定が下りるまで唱え続けるのが「日本流」なのである。

同じように、感染拡大に備えて人工呼吸器や検査セットや病床の確保をしないできたのは、べつに首相や知事の「不作為」や「怠慢」ではない（少なくとも主観的には）。今回のパンデミックにおける日本の失敗が同一のパターンを飽きずに繰り返していることがわかる。そろそろそのことに気づいてもいいのではないか。気づかなければ、同じことがこれからも繰り返されるし、いずれはそれがわが国の命とりになる。



(2020年5月10日)